

☆地下鉄大江戸線牛込柳町東口より 2 分

☆地下鉄新宿線曙橋より 15 分

問い合わせ先

東京都新宿区四谷 3-5 太陽コンサルタンツ内

山崎農業研究所事務局長・小泉浩郎

y.nouken@taiyo-c.co.jp

□ 目 次 □-----

<今週の提言>麦づくりの地の「うどんの里」振興会 石川秀勇

<読者の声>今井さんから

<旬を食べる一野良からの便り・13> “大根” 小泉浩郎

<79 歳の意見>高齢者の歩行と健康-車組より徒歩組の勝ち 原田 勉

<日本たまご事情>

世界たまご屋会議 IEC (International Egg Commission)―その 4―

<山崎農業研究所情報>

◇第 114 回定例研究会速報 (その 2)

2. 農業用水を地域で守り活かす-住民による農業用水路の
環境再生と保全管理

―東京農業大学教授 中村 好男氏

<エッセイ>カラスの知恵 安富六郎

<農工大日中友好会第 10 回同窓会・訪中写真報告ページ完成のお知らせ>

<編集後記・同人の近況報告>11 月 25 日～12 月 7 日

<今週の提言>麦づくりの地の「うどんの里」振興会

今年 6 月、館林にある製粉記念館（日清フーズ・館林工場の構内に所在）を見学した。この記念館は、いま国内最大手の製粉メーカーである日清製粉の前身である館林製粉が明治 33（1900）年にこの地に設立されて、ちょうど 70 周年に当たる昭和 45 年に開設された。建物は、館林製粉時代の工場の本館を改修したもので、製粉に関する内外の諸資料等が収められている。

この館林工場は、誕生してから 102 年後の平成 14 年まで製粉を行ってきたが、当部門は最新設備を誇る臨海に立地する工場に集約になり、現在は小麦粉

の加工製品をつくる工場のみが操業している。

長い歴史のあるここでの製粉工程の工場は閉鎖になったが、館林地域には製めんを行う業者やうどんの店等が数多い。製粉工場の1世紀にもわたる存続が、そのように盛んにした面が少なからずあったのであろう。そして、平成5年頃の立ち上げという、<麺のまち「うどんの里・館林」振興会>が結成されている。合わせて30ほどのうどん店や製めん業者が加盟するとともに、商工会議所や物産振興協会といったところ等が構成メンバーに加わっている。そのリーフレットにこう記されている。

“この地は、むかしから良質の小麦の産地です。小麦を栽培するのに適した肥えた水はけの良い土に、日照時間が長い気候で良質の小麦が栽培されています。

この小麦と豊かな水で、昔から手打ちめんの技巧が発達し、コシの強い風味豊かな味わい抜群のおいしい身近な食べ物として親しまれ、「うどんの里・館林」が生まれました。”

振興会の行なう活動に対して、JAなど農のサイドからの協調はこれまでのところ薄い状況とのことであった。しかし、地産地消の促進を視点におくと、こうした会の活動には関心を強くし幅広く連携していくことが、きわめて大切になってきているように思われる。

石川 秀勇

山崎農業研究所会員、千葉県野田市在住

y.nouken@taiyo-c.co.jp

<読者の声>

●11/30 今井民俊さんから

以前、鳥インフルエンザのおりにメールをして以来ご返事もできずに失礼いたしました。というのも、私の父光男は、11月10日にとうとう癌にやられてしまいました。67歳でした。

父は松平（愛知県豊田市九久平 家康の生まれたところ）で育ち、高校入学（猿投農林高等学校）から今井家に、生涯を、農機具の販売、特に修理にそそいでいました。お葬式の朝にも、そのことを知らない、ちょっと遠方の方が修理できないかねとたずねられてきたほどです。

今のご時世の不景気や減反、などなどで、とうとう、田んぼもてばなさなくてはならなくなってしまうましたが、今年の稲の収穫はどうか、こうにか、父とおなじく、なぜか?! コンバイン、乾燥機、もろもろの機材が修理不能となり、隣人、親戚のお力で、“電子耕さん” の情報もとても役にたち、やっどのおもいで、父に新米（みねあさひ）を食させることができ、今となれば本当によかったとおもいます。

まだ、ほんの少しのこった田んぼと、畑で、“電子耕さん” のメールを参考に、すこしでもいい作物を作っていけたら、幸せとおもい、努力していこうとおもいます。

今後とも内容のあるメールマガジンを期待しておりますので、宜しくお願いいたします。

添付ファイルは、父がそだてていた、鶏達です。

<http://nazuna.com/~tom/148-20041208/page0001.htm>

<旬を食べる一野良からの便り・13> “大根” 小泉浩郎

今が、大根の旬だ。おでん、風呂吹き大根も良いが、採りたても良い。みずみずしい緑の葉っぱ。土から数センチ、遠慮がちに脛を覗かせている。朝露の中、1本だけ抜いて自転車の籠に入れる。朝のみそ汁の具と大根下ろしとそして大根の葉っぱの塩もみとなって食卓に上る。

みそ汁にはセンゾップが切った（千切り）大根を入れるが、最後に入れて30秒、カリカリという歯ざわりが残る程度が美味しい。大根下ろしは、二股の木に鋸状の竹をつけた手製の「ガリガリ下し」で下す。辛味と甘味が良く調和する。だが、最近では、辛味の少ない青首大根ばかりでこの味が出ない。さて、特製大根の葉っぱの塩もみは、大根の葉を1センチぐらいにきざみ、鷹の爪（唐辛子）好みでいれて、少し多めの塩で揉む。5分ぐらい置いてからたっぷりの水に入

れ、搦うようにして水をしぼる。これにかつお節をのせ、ちょっと醤油をたらず。新鮮な緑をそのまま頂く感じだ。

大根は地方、地方に風土に適した品種がある。その味、形も千差万別。その代表が大きさを桜島大根、長さで守口大根、辛味では「信州地大根」である。まんが「おいしんぼ」に出てくる絶品蕎麦の辛味、暮坪かぶは、大根でなく蕪である。昨秋、中国・雲南の南部の方を歩いた。水田が見渡す限り大根である。品種は青首大根、切干し大根として輸出されるという。日本もそのマーケットなのだろうか。

小泉 浩郎

山崎農業研究所事務局長

y.noken@taiyo-c.co.jp

<79歳の意見>高齢者の歩行と健康-車組より徒歩組の勝ち

近藤康男先生は、あと20日で106歳になられる。先生の長寿の秘訣は、歩くことである。中学時代から徒歩通学で、往復12キロの道を5年間、無遅刻無欠勤だった。

100歳を越えても農文協図書館に通勤、バス・電車・バスを乗り継いで往復2時間、しかもひとりで杖なしの歩きだった。

現在は、目が不自由になって自宅静養中であるが、家の中を歩いて三度の食事を自分ですませておられる。

『近藤康男 三世紀を生きて』の口絵写真にあるが、百二歳の記念講話でもひとりで壇上まで歩いて登られ、1時間の講話をされた。同じ時、卒寿記念講話をされた農水相の元高官は、壇上に登る足元も危なげで講話はまとまりのないものに終わった。

近藤先生は、「車組と徒歩組の違いだよ」と言われた。車利用の人より徒歩組の方が勝ちということである。

私は前回まで「転倒防止」と「杖の使い方」を書いてきたが、本音はやはり「死ぬまで元気でいたい」ということである。

そのために「転ばぬ先の杖」を使い始めたが、できれば杖なしで歩きたいのが本心である。だから電車だけを利用する時か散歩する時は杖なしで、階段も一歩ずつ歩くように心掛けている。通勤の日も休みの日も、毎日30分間は歩き、牛乳1本は飲むようにしている。

散歩は、骨を強くし、ふらつきを少なくし、転びにくくすると思っている。高血圧と動脈硬化は持病であるが、毎日歩くことで筋力の低下を防ぐようにしたい。

足腰が弱ったら筋力体操をせよとすすめられているが、80歳で高血圧だから余り無理しないでストレッチ体操程度にしている。

雨の日など外の散歩ができない時は、固定式自転車（エアロバイク）を家の中でこぐようにしている。

現在、一番難しいのは、眼が不自由で、読み書きができないこと。眼を使わないで何かできるものはなにか。休養と運動をどの程度にするか。つい昼寝の時間が長くなったり、休むことが多くなり運動不足になることである。

従って、週三回の図書館通勤だけは、少し無理をしてでも続けることにしている。

今年も終わりに近づいた。電子耕のコラムは続けたいと思っているが、社会的視野も狭くなり、パンチの効いたコラムが送信できなくて申し訳ないと思っている。

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田勉

<http://nazuna.com/tom/>

<日本たまご事情>

世界たまご屋会議 IEC (International Egg Commission)—その4—

各国代表が自国の鶏卵事情を説明する当日、私は会場に着いてもまだ準備が済んでいなかった。ABC順に各国が説明を始めた。まだ私は英作文に四苦八苦していた。たちまち順番がきて Japan の名前が呼び上げられた。私は準備不足のまま演台に立った。

こうなれば仕方がない、大事なことを簡潔に大きな声でゆっくり喋ろう、そうすれば時間も稼げるし…。火事場の馬鹿力ではないが人間ピンチになると意外なチカラが出るらしい。苦勞して作った原稿に眼を落としながら、とにもかくにも言いたいことを、とつとつとつかえながら時間内に英語で言い終えた。

たまげた事に「日本人はタマゴを世界一多く食べる、だから日本人は世界一の長寿国だ、長生きしたければタマゴをもっと食べよう」のくだりを話した時、自分で言うのも可笑しいが会場大拍手と大爆笑となった。予想していなかったことだけに喋った当人が慌ててしまった。

上機嫌になって、あとでこの事を別行動していたカミさんに話すと、「あなたの英語があまりにも下手くそだったから、それが同情を集めたのよ」とつれない。それもそうだがずばり急所を突かれると気分が悪い。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp>

<山崎農業研究所情報>

◇第 114 回定例研究会速報 (その 2)

2004 年 11 月 6 日 太陽コンサルタンツ会議室 20 名参加

[講演要旨]

2. 農業用水を地域で守り活かす-住民による農業用水路の
環境再生と保全管理

—東京農業大学教授 中村 好男氏

▽農業用水の水管理

昔から川は農業と密接である。上流には森林があり水源池は神聖な場所である。北海道のアイヌには、川は魚を与えてくれるが、その源は海からの魚の遡上によるので海が神聖な場所という逆の考えがある。このように見ると、川は森と農地と海とを繋いでいる大切な流れである。

用水路の構築にはそれぞれの地域文化が反映される。わが国での河川の総延長は14万km、これにたいして農業用水路は基幹水路4万kmで全水路合計は40万kmになっている。水路1km当たり116haの農地を潤している計算になる。これを再建設すれば時価で25兆円かかるといわれる。また水路の保全には年間4.5兆円かかると思定されている。

溜め池はわが国に21万個ある。これは稲作期に水が不足するからである。水資源については年間降水量の22%が利用されている。水資源開発が進み農用地の地域循環システムができつつあるが、水資源の安定供給には溜め池は欠かせない。わが国では大量の水が使われているにもかかわらず自然保護が良くできている。群馬県の鏡川では水不足が著しいため、昭和のはじめに水資源開発がなされたが、その時に福祉の効果を入れたことは注目される。このように、わが国の水資源政策には高い技術が見られる。

土地改良区には施設管理などの本来の仕事に加えて地域管理機能を持たせるべきである。用水管理には住民参加型が望ましい。地域の今後の発展には水の地域税を考えることが望まれる。すでに福岡県、岡山県では見られる。一時は非農家からも徴収した。観光資源問題としても水質保全は重要である。

▽グリーンツーリズム

農村-都市のグリーンツーリズム：群馬県甘楽の用水路に雄川（おがわ）の堰がある。ここがいま農業用水としては唯一名水百選に選ばれている。この堰は400年前に生活用水、庭園用水、城下に220haの水田灌漑に役立っている多目的用水である。しかし現在は都市化の影響で環境は悪くなった。昭和50年に水路ゴミ掃除などで水質向上に努力した結果、昭和60年に日本名水百選に選ばれた。この地域では有機農業が盛んでキウイ栽培には東京都北区と結んで生ゴミの資源循環を行なっている。

農村資源活用型：群馬県東村箱島湧水も名水として有名である。この地域はもとは養蚕が盛んであったので、農薬など薬剤は使わなかったために水質が歴史的要良かった。クレソン生産をする。周辺は水田と林地がありホタル生育に適している。東京、神奈川、千葉からの観光客が多い。年齢は30-40台の人が多く、子供に見せるためという。小田原岡部地区ではホタルの育成にカワニナを用いている。

都市農村連携型：三島市の源兵衛川の事例がある。湧水の農業用水利用、工業用水の還元がある。土地改良区、行政、市民、企業一体の「水の都づくり」を行なっている。

▽まとめ

自然を1とし農地、水路が加わったものを2次自然とすれば、今後これを1.5次の自然により近い方向に復元する。たとえば川の直線化された部分を自然に近い蛇行をさせる。水質を高める。生産される農産物の環境付加価値を高めることが可能。地域福祉にも貢献できるように農を進めることが望まれる。

(文責：安富六郎)

<エッセイ>カラスの知恵

神社の森の近くを通る。カラスがたむろしている。なんとなく不吉な予感がする。しかしカラスは神社の神の使いと言われているから、むやみにいじめると罰(ばち)が当たる。カラスはイソップ物語にも登場する利口な鳥である。小学校時代にカラスを生け捕りにして馴らそうとした人がいたが、結局ダメだった。人間不信の鳥である。

こんなことを考えて今日も森の近くを通ったとき、突然「オイ」という声が聞こえてきた。誰も近くにいないのに不思議だな、と思っていると、また「オイ」と言うのである。つづいてしわがれ声で、「ガー」と鳴いたので、カラスと分かった。電信柱のてっぺんにとまっている。人まねをするのは九官鳥が有名であるが、カラスもかなりのタレントである。仕込めば物まねくらいは楽にするだろう。気にくわない人の顔を覚えていて攻撃してくることもあるらしい。

かつてカラス撃退の名案を研究している人がいた。カラスをいじめてその声を録音して聞かせようというのである。しかし、はじめは成功するが、すぐ慣れて効果がないそうだ。名案はなかなか見つからない。ところがこの利口な鳥も「カラス捕獲装置」にはまんまと引っかかってしまう。

人が入れるくらいの大きい鳥小屋の屋根に入り口を設け、その入り口直下に数本の紐を張って、それに神社の御幣束の紙の代わりに針金をつるしておく。すると、カラスが小屋に入るときは抵抗なく入れるが、飛び出すときにその針金が邪魔になって飛び出せないという仕掛けである。誰が発明したのだろう。

小屋の中にカラスの好物の脂身の生肉を入れておくと檻の中でご馳走にありついているのを見て、また別のカラスが入ってくるのだそうだ。

さすが人間様の方が知恵がある。しかし、こんなよい頭を持っているのに平和と民主主義のためと言って人間は戦争のわなに飛び込んでしまう。果たしてどっちが本当の知恵者なのか。いや、知恵の程度は5分5分なのかも知れない。

安富 六郎

山崎農研会員 電子耕編集同人

y.noken@taiyo-c.co.jp

<農工大日中友好会第10回同窓会・訪中写真報告ページ完成のお知らせ>

現在、東京農工大学には約150名の中国留学生がおり、単科大学の学生数比率からすれば、かなり多い方だそうです。

それら留学生の同窓会が北京で設立されたのが10年前の1994年でした。

*詳しくは、「農工大日中友好会の経過と歴史」

<http://jc-yuko.gr.jp/keika.html>

をご覧ください。

同時に設立された、日本側の友好組織である、

【東京農工大学中国同窓会と友好を深める会】

<http://jc-yuko.gr.jp/>

の訪中も今年の9月で10回目となりました。

このたび、参加者のみなさんのご協力で、第10回訪中報告集ページ（全26頁）が完成しましたので、ご紹介します。

第10回 東京農工大学日中友好会の訪中報告

<http://jc-yuko.gr.jp/pct10/top/photo001.htm>

（農工大学日中友好会訪中団長 赤木昭治：元東京農業大学教授 挨拶）

第10回 訪中報告写真集（全23頁）*1頁目に参加者名簿掲載

<http://jc-yuko.gr.jp/pct10/page0001.htm>

(2004年9月13～19日) 旅行日程表

<http://jc-yuko.gr.jp/jigyoo040730.html>

早川潔さん(日本農業新聞編集主幹)による参加記

<http://jc-yuko.gr.jp/pct10/top/hayakawa.html>

是非、ご覧ください。

東京農工大学中国同窓会と友好を深める会 顧問 原田勉

<編集後記・同人の近況報告> (11月25日～12月7日)

わたしの実家では、晩秋の頃に漬物を漬けるのが習慣である。春先までの分として大根と白菜をたっぷり漬ける。数日がかりのしごとだ。いつかは習おうと思いつきながら果たせずにいるのだが、漬け物をつくるといってもいまの住まいでは樽をおく場所にもことかくことに気づいた。住宅事情がかわると食のかかわりかたもかわるということか。とりあえずは年末にでもかけて、おすそわけをしてもらおう。(山崎農業研究所会員・田口 均)

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

- 1、件名(見出し)を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。
- 5、JIS X0208 規格外の文字(機種依存文字)のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 149号の締め切りは12月20日、発行は12月22日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願い致します。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735円 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第148号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2004.12.8 (水) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

***** ここまで『電子耕』 *****